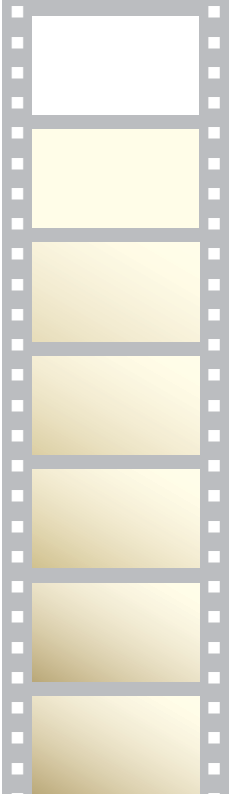
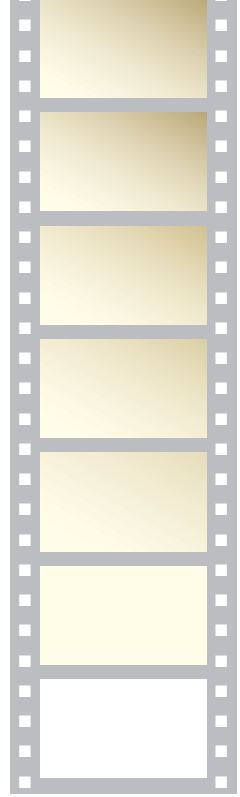


伸^ノさんのシネマトーク

鈴木 伸夫



第三十七回 「残されたハードルは？」

高校二年の二学期から仙台での高校生活が始まりました。「団塊の世代」のぼくが、社会人になるまでに越えなければならぬ大きなハードルは「大学受験」と「就職試験」のふたつでした。

ぼくらの時代にも「推せん入学」はありましたが、推せんされるのは成績の優秀な生徒だけで、ぼくのような転校生には、そんな話はひとつもありませんでした。特に、ぼくは「○○大学へ入学してこの学問を勉強したい」という気もなかったのだ、とりあえず「学歴があれば就職に有利だ」と考え、W大学の法科と経済、C大学の法科と文学部、地元、TG大の法科を受験する目標で勉強に入りました。

目標は立てるものの、いつも計画倒れに終わり、アツという間に受験シーズンに突入してしまっただけです。

W大とC大の試験は、東京都内で実施のため、宿泊しなければならず、「どこか試験場に近くて交通の便利なところはないか？」と考えました。するとちよūdい

宿泊所があつたのです。

そこは、父が東京出張の時、常宿にしている飯田橋の労働会館でした。手元に領収書がありますが、宿泊料が600円、朝食が120円、夕食が250円と書いてあるので、一泊二食で970円。昭和40年代としては、格安料金の宿泊施設でした。

また、管理のおじさん、おばさんの作つてくれる朝食のみそ汁は「きょうも一日がんばろう」という希望が胸にわいてくる具だくさんのみそ汁でした。

飯田橋の周りには、たくさんのお立、私立の大学がありました。公立vs公立、公立vs私立、私立vs私立の学力レベル格差にぼくはコンプレックスを感じていました。

「大学なんて、入学出来れば、あとは自分の努力次第でどうにでもなる」と信じて勉強していましたが、全国の壁は厚く、東京から受け取る合否電報は「ザンネン、キオオトスナ」「ザンネン、ツギガンバレ」という電文で、残す大学受験のハードルは、地元、T G 法学部法律学科の発表待ちだけとなったのです。

これを野球で例えると、人生というバッターボックスのなかでぼくは、ツースト

